

12月31日大晦日、19時05分。

学校爆発まで残り五時間。

「はっ、はあっ、はっ、はっ、はっ」

全速力で自転車をこぐ。

吐いたそばから息が白く蒸発していく。

今夜は一段と冷え込みが厳しい。

暮れも押し迫った十二月末、大晦日の夜に出歩く酔狂な通

行人はまばらだ。

今頃賢い連中は炬燵でぬくぬく猫のように丸まってみかんの皮剥きながらテレビ見るか年越しそば啜ってる。それこそ冬の醍醐味、炬燵でぐうたらごろ寝してるみなさんに呪いあれ。とくに妹。身内の恨みはげに深い。

アスファルトを打った道のど真ん中を猛然と風切り突っ走る。

等間隔に並ぶ街灯が橙の光曳く彗星の残像となって流れ去る。

体重をかけ踏むごとペダルが不吉に軋む。

凍てつくハンドルが手にへばりつく。

閑散とした夜道をママチャリで爆走する高校生はさぞ不審で目立つだろう。

職質かけられたらめんどくさいが不思議とおまわりにも出

会わない。

公僕も大晦日まで働き詰めは馬鹿らしいんだろうと勝手に想像、交番で寂しくそば啜る幻影に同情。

税金自腹で切つてない平凡怠惰な高校生の俺としちゃ見回りがさぼる彼らを責める気はさらさらない、あと五時間で学校が爆発するにしてもだ。

実際どうにもできないだろ？

警察の手は借りれない。相手は俺一人が来ることを望んでる。

宣戦布告。

俺に対する挑戦だ。

ハンドルを握りながら腕時計を見る。

蛍光塗料を塗られ闇の中おぼろに浮かぶ文字盤が19時10分をさす。

あまり時間はない。余裕ぶっこいてたらドカン、だ。

ペースを上げる。水面下の白鳥のようにがむしやらにこぐ。前のめり、振り落とされぬようハンドルにしがみつく。

顔が痛い。

鼻が痛い。

服から出た場所ぜんぶ痛い。

身を切るような寒さって比喩じゃなく実感だったんだ、と昔の人の表現力に感心。

俺は走る。

師匠じゃねーのに。

『なんで十二月を師走っていうか知ってるか？』
冬の風より温度が低い、淡々とした声が耳に甦る。

『知んね。なんで？』

『師匠が走るからだよ』

『まんまじゃん。意味わかんね。師匠つて何、K1？
なんで冬になると師匠が走んの？ 大晦日の頂上決戦に備えて走りこみの特訓？』

『師走はあて字。ほんとは師馳すつて書く』

宙にすらすらと字を書く。せつかくだけど、わかりません。自慢じゃないが俺は全科目低迷中で、とくに古典はひどい。白い息を吐きながら宙に字を書く指先を辿る。

寒気で眼鏡のレンズが曇り、表情を地味に隠す。

俺たちは一緒に歩いてきた。十二月初旬、木枯らしすさぶ帰り道。

あいつは唐突に言い出したのだ。

『師匠は坊主のこと。坊主が走り回るほど忙しくなるから師馳すだつて』

『え？ なんで走んの？ 年末葬式たてこんでるの？ さ

みいから心臓麻痺とかでぼっくり逝つちやうお年寄り多いつてことか。あ、俺のじいちゃんが死んだのも十二月だ』

『短絡だな』
苦笑する。

むつとする。

『じいちゃんばかにすんな。死人に鞭打つなんて最低だぞ』
『いや、お前の短絡思考を馬鹿にしてるんであつて、故人には敬意を表する』

『ならいい……待て、よくない。それ結局、俺ばかりしてんだろ』

『ばれたか』

性格が悪い。

『とにかく、僧侶が袈裟からげてあたふた走り回るくらい忙しいから師走なんだつてさ』

『へえ。へえ。へえ』

『古くね、それ？』

あいつは無駄に物知りだった。俺が知らないことをたくさん知っていて、それとなく知識をひけらかす悪癖があった。俺はただ馬鹿みたいに口開けて、あいつが時折ふと思いついたように垂れ流す雑駁で広範な知識に感心した。俺は相槌をうつ係、あいつは尊敬の眼差しを受ける係といつからか役割分担が決まっていた。

その事に不満を覚えもしなかった。そういうもんだと納得していた。あいつもそうとばかり思っていた。

違ったのか？

俺の勝手な思いあがりだったのか？

「あいつは目を細めてものを見る癖がある。

ただでさえ視力が悪く細身のフレームの眼鏡をかけてるのに。

あの時も、あいつは見えないものを見ようとするように目を細め、道の向こうを眺めていた。

俺はあいつの横顔を見ていた。

眼鏡の似合う知的な顔だち、伶俐な切れ長の目。

色は白く、体温の変化がすぐ肌に出る。

頬があざやかに紅潮していた。単純に寒さのためだ。

俺はあいつが恥ずかしがるのを見たことがない。

取り乱したりうろたえたり声を大にして叫んだり、感情的になるところを、一回も見た記憶がない。出会ってそろそろ一年が経つというのに、あいつは今でもどこか距離をおいている。どんだけ砕けた口をきいても、ふざけたふりをしているても、見えない境界線を感じる。

ボーダーライン。

『年が果てる意味の年果つから変化した説、四季の果てる意味の四極から変化した説、一年の最後になし終える意味の為果つから変化した説もある』

『さすがオールAの優等生はおつしやることちがう』

コートに手を突っ込みさぶさぶと身を縮かめる。

隣を歩くあいつは皮肉つぼく鼻で笑う。常識だといわんばかりの態度が癪だ。

『お前こそ。古典の授業中なに聞いてたんだ？』

『寝てた。六限の古典は睡眠タイム。部活にそなえて英気

養つとかなきゃ』

『引退したんじゃないのか』

『休止中だけ。春になったら再開する。将棋でいうと穴熊だな、今は穴ごもりなの。だつてさー部室暖房入つてないから寒いじゃん。今は積みゲー崩し期間なの、徹夜で。

ドラクエが俺を待ってる。あれ、ドラゴンほとんど関係ないのに、なんでドラクエっていうんだろ。ファイナルファンタジーも謎。十本以上出てくるくせしてなにがファイナル？』

『購買者の気力がファイナルなんだろ』

『……お前頭いいな』

年果つ、四極、為果つと口の中でくりかえす。

古典教師の口から聞けば眠気を誘うだけの退屈な話が、あいつの口から聞くと言霊の通った特別な知識に思えた。

年果てる月。

四季の終わる月。

何かをなし終えるための月。

一年の、最後のチャンス。

よつぼどの事がない限り俺たちは一緒に帰った。なんとなくそういうことになっていた。示し合わせたわけじゃなく、本当になんともなく漠然と、あいつが腰を上げれば俺もと靴をとった。優等生は寡黙、劣等生は多弁。沈黙は金の諺を引き合いに出すまでもなく賢者は口数が少ないものだ。

大抵くだらない話をした。俺が一方的にまくしたてる本やバイトの話、広くて浅い趣味の話を、あいつは適当に頷きながら聞いた。無関心に聞き流してるわけじゃない証左に、時々鋭い警句を吐いた。

俺たちが最後に一緒に帰ったあの日。

あいつは妙に真面目くさった顔をして、こう言った。

『十二月は、終わる月だ』

今思えば、予告だった。

サインだった。

なんで聞き流した？

手遅れになるまで放つといた？

「年果つ、四極、為果つ」

俺にミステリ読みの才能はない。

好きな事が必ずしも得意分野と限らないとは世知辛い。

名探偵は関係者がぼろっと零したなげない言葉の端を掴まえて謎をとくのに、間抜けな俺ときたら、本人が宣戦布告してくるまでぜんぜん気付かなかったのだ。

自分の間抜けさを振り切るようにペダルを踏みこむ。

酷寒の風が容赦なく吹きつける。

十二月は終わる月だという言葉が頭の中を堂々巡り、不吉な予告と一緒にあいつの顔が脳裏に浮かぶ。

眼鏡の似合う知的な顔だちにつきまとう孤独な影、ボーダーラインの彼方を見ているような透徹した眼差し。

俺の親友は、学校と心中するつもりだ。

終わりののはじまりは一本の電話。

『爆弾仕掛けた』

「え？」

『学校に』

「ちよ、待」

落ち着け、俺。

台所で物音がする。妹が家事をやっている。

反抗期真っ盛りで生意気な口答えばつかの妹は中二、パートで留守がちなお袋の主婦業を一人前に代行してる。

廊下は冷え込んで裸足の足裏からみしみしと冷気が染みみくる。

ああ、氷点下きると骨つて鳴るんだ、ほんとに。

一瞬の思考停止。

受話器を握ったまま呆然と立ち尽くす。

ありていにいって、我が家は古い。事実に即しボロいと言うべきか。おかげで音がよく響く。板張りの床はみしみし軋み、地震がきたら一発で崩壊しそうな不安を抱かせる。

そしてなんとなく薄暗い。

『秋山、聞いてる？』

機械を通した声はいやに他人行儀に聞こえた。

確認され、現実に戻る。どれくらい放心してたのか、たぶん時間にして五秒くらいだが随分長く感じた。台所から音痴な鼻歌がもれる。

『妹？』

背景の鼻歌を聞きつけ電話向こうの相手が質問する。

「珍獣」

『お袋さんは？』

「パート。まだ帰ってない」

『大晦日もか。大変だな』

「親父いねーし、しかたねーよ」

落ち着け、俺。頭を冷やせ。たちの悪い冗談まともに受けるな。

深呼吸し、壁に凭れる。背中を預けた壁の固さに平常心を取り戻す。お袋はスーパールの惣菜売り場で働いてる。親父は俺がガキの頃に女作って蒸発した。よくある話、ありふれた不幸話。典型的な貧乏母子家庭だが、お袋の口やかましい躰がよかつたのか、環境の割には俺も妹も結構まともに育った気がする。自己申告だからあてにならないけど。

『今なにしてる？』

「妹？ そば茹でてる」

『いや、お前』

「電話してる」

『その前』

「ラスボス戦突入したとこ」

思い出すと怒りが滾る。

受話器を握りなおし、嘯み付くような勢いで怒鳴る。

「なんだよ、一体。いきなり電話かけてきて爆弾仕掛けたとかくだらない冗談ぬかしやがって、こつちはそれどころじゃねーよ、大事なラスボス戦かかってたのに!! 俺より成績いいくせに悪ふざけしやがって、切るぞ! ドラクエに戻る!!」

『ほんただよ』

電話を叩ききろうとして、耳からはなす寸前、冷静に被せる声に思いとどまる。

機械を通した声は酷くよそよそしく冷淡にさえ感じた。

同級生に混じっても低い声は、酷薄な響きを持つていた。

まんじりともせず受話器を掴み、置こうかどうしようか逡巡する。

台所から物音がする。そばを茹でるいい匂いが漂ってくる。妹がなにかうるさく叫んでる、「兄貴も手伝ってよ」とかそんなところだろう。

生まれてこのかた十七回目の大晦日の夜、我が家はいつものように平和だった。

俺の心の中だけが冷えていた。

電話から漏れる声は現実感を希薄にする。

ゲームを中断され不機嫌に階段を駆け下りて、うるさいと妹に注意され、そこまでは普段どおりだった。受話器をとつ

た瞬間、カチリと現実から非現実に入り替わった。スイッチの切り替わる音がたしかに聞こえた。現実と地続きの平凡な日常が、受話器をとつた瞬間、非日常に接続されてしまった。

口の中が乾く。

「…………だからさ、大晦日までくだらない事でかけてくんなって。らしくねーよ、優等生のお前が。受験勉強でもしてるよ。どういう風の吹き回しだよ一体、俺を気分転換に利用すんなって。大体さ、そういう冗談、不謹慎だろ。言っていないことと悪いことの区別付くヤツだと思ってただけで、買いかぶりか」

『冗談なら不謹慎だけど、マジだから』

「マジって。はは。爆弾仕掛けたって?」

『ああ』

声には冗談の成分が含まれてなかった。

冗談と笑い飛ばすには軽薄さが欠落していた。

階段を降り、受話器をとつた時に背に走った悪寒がどんどん強くなる。

俗にいう胸騒ぎ、嫌な予感、前ぶれ。

自慢じゃないが俺にはこれっぽっちも靈感がない。にも関わらず、うるさくがなりたてる電話を見た途端、ああ、これは出ちやいけないとためらった。出たらきつとめんどく

さいことに巻き込まれると直感した。しかし鳴り続けるベルを無視するにはちよつと度胸が足りなかった。

緊急の用事だったら大変だ。

お袋がパート先で倒れたのかもしれない。

「うっさい早く出ろグズ兄貴」と妹に蹴られ、しぶしぶ受話器をとりあげ……案の定、厄介ごとに巻き込まれた。口をパクパク開閉、途切れた会話を繋ぐ言葉をさがす。

「あー………物理と化学成績よかつたもんな」

『まあな』

謙遜するでもなくさらりと言う。事実だからまあ肯定するつきやないだろうけど、イヤミなやつめ。

ちよつと待て、会話の方向性はこれでいいのか、他に突き詰めなきゃいけないことあるんじゃないか。

「爆弾、どうやって作つたの？」

俺は馬鹿だ。

好奇心からついついそんなことを聞いてしまう。

『ネットや本で情報しいれて。結構身近にあるもんで作れるんだぜ』

「威力はどれくらい？」

『まあ、校舎は吹っ飛ばかな』

「すっげー！」

そういうえば、こいつは優等生だった。学年一どころか、学

校一の称号付けても文句なしの天才だった。鼻歌まじりで爆弾だつて作れるだろう。

「……いや、すごいはいけど。ちよつと尊敬しちまつたけど、やばいだろ、それ？ 爆弾だろ、爆弾。ボンッ！ て爆発炎上だろ。お前が頭いいのは知つてるけど、そんな家で簡単に作れるワケ？ ネットで情報集めたつて……」

『今はなんでもネットにあるから、検索すればすぐ。ちよつと改良加えたけど。威力が数十倍はねあがつた自信作』

「……勉強のしすぎで頭がいかれちまつたんだな」

『ひよつとして同情してる？ まだ嘘だと思つてる？』

「大晦日つて病院あいてたつけ、頭の。それか心療内科？ とにかくさ、病院開き次第一番に行つたほうがいいつて。普通じゃねーよお前。そういう冗談、キヤラじゃねーし。

一回診てもらつたほうがいいつて、頭。嘔吐きで愉快な小人さんが住んでるよ。時々頭の中から声が聞こえない？

絶対小人さんだよ、岩盤工事でガリガリ頭蓋骨に穴あけてんだつて」

受話器のコードを指に絡め遊びながら、すつかり脱力して壁によりかかる。

一瞬でも真に受けそうになつた自分を恥じる。

俺の友達は来年に控えた受験のストレスで言動がおかしくなつてる。自分が爆弾を手がけたと思ひ込み、目下たつた

一人のダチの俺に、傍迷惑な悪戯電話をかけてきやがった。とつと部屋に戻ろう。廊下は寒い。ラスボス戦も中断したままだ。

『……………信用ないな、俺』

失望のため息を吐く。

「そういえばさ、麻生。なんで携帯じゃなく家電にかけてきたの？」

『切られて繋がらなかったらやだし。アドレス削除されたんじゃないかって思っつて、確実に繋がるほうを選んだ』

「なんで消すんだよ」

『わかっつてるだろ』

突き放すような、声。

「え」

心臓がひやりとする。

『見たんだろ？』

嘲笑を含んだ挑発。脳裏に切れ長の目が浮かぶ。

電波に乗じて届く声が鼓膜をざらりとなめ、受話器を掴む手が汗ばむ。電話ごしの相手が今どんな顔をしてるか、想像してしまふ。

『とほけるな』

脅迫するような声。

見て見ぬふりした俺の卑劣さを指摘し糾弾する、容赦ない

声。

自分は知つてるぞと全能の優越感をふりかぶり追い詰めていく。

『理由、わかっつてるだろ』

「麻生」

初めて名前を呼ぶ。困惑した声が出た。みつともないほどだ。

壁から背中をおこし受話器をのぞきこむ。

重苦しい沈黙が漂う。

台所から妹の鼻歌と立ち働く物音が響く。

付けっぱなしのテレビの音声が漏れてくる。

手の中の受話器がとつともなく邪悪で禍々しい物に思える。見慣れた廊下の光景が現実味をなくし奇妙に褪せて映る。

ここは俺の家だ。

俺が十七年生まれ育つた安全な場所、なのに吹きさらしで無防備な気がする。

『前に聞いてたからさ。母子家庭で、母親が勤めに出てつて。夜中に突然電話かかってきたら、出ないわけにいかないだろ。妹の手前もあるし、不安にさせちゃ可哀相だし』

「麻生、お前」

『秋山』

ひそやかに呼び返される。

『忘れたふりするな』

抑制した調子で畳み掛けられ、返答に詰まる。手の中の受話器が火傷しそうな熱をもつ。

侮蔑に満ちた指摘に、意識して思い出さぬようしていた出来事のフラッシュバックが襲う。

西日さす放課後の図書室。

片隅の書架にもたれ、学ランをはだけ肌をさらした麻生に被さる背中。

窓から射す夕日で図書室は赤く燃えていた。

埃の匂いが鼻先をつく。

かぶりを振つておぞましい残像を払い、平静を繕った声を受話器の穴に注ぎこむ。

「ふざけんな。わけわかんねーよ。もう切るぞ、悪ふざけにやうんざりだ」

『秋山透』

麻生が俺の本名を呼ぶ。

下の名前を含めて呼ばれるのは初めてで、受話器を置こうとした手がおもわずとまる。

見下ろした受話器から零れたのは、予想外の問い。

『なんで人を殺しちやいけないんだ？』

「は？」

『教えてくれよ。なんで人を殺しちやいけないんだ。ずっと疑問だったんだ、それが』

うんざりだ。受話器を置こうとした。電話を切ろうとした。できなかった。

答えのない問いに込められた静かな絶望が、受話器を伝って、俺の手までもしびれさせる。

『お前、推理小説好きでよく読むだろ。どっかに書いてないか答え。人を殺しちやいけない理由。いろんな小説でいろんな名探偵が演説ぶってるだろ。だったら、わからないか』

「人を殺したら自分が殺されても文句言えないから、とか」

『適当言ってる？』

「この答えじゃ、だめか」

『俺は納得しない』

そばを茹でるいい匂いが漂ってくるが、食欲はどっかに消えていた。

『人を殺しちやだめだっていうやつは、だれかを殺したい

ほど憎んだことがないのか』

意味わかんね、と鼻であしらうこともできた。

早く会話を終わらせたいなら、受話器をおけばいい。できなかった。

硬直していた。

受話器を媒介するのは、感染する憎悪そのものだった。

『前あつたろ。いじめられた復讐に爆弾仕掛けて教室ごと吹っ飛ばした事件』

「……ああ」

口の中を舐め、唾液を湧かせ、ようやくそれだけ言う。

『たしかに感心しない事件だけど、側面では理にならなくてと思うんだよね、俺は』

麻生の言いたいことがわからない。

怪物と話してようで眩暈を覚える。

受話器が異物に見える。

日常に警報を鳴らす不吉な異物が、手にずっしり食い込む。固唾を呑み、受話器から流れる声に耳を傾ける。

『だってそうだろ。大昔いじめられた仕返しに無関係な女子高生や主婦や子供襲つて憂さ晴らす傍迷惑な通り魔より、いじめた張本人にリアルタイムで復讐するほうが、はるかに効率的で理にならなくていいやないか。クラスぐるみでいじめてたんなら教室ごと吹っ飛ばされても文句は言えない。いじめっこは責任が分散すると高くくつてるかもしれないけど、いじめられっこにしてみれば、同罪だろ。許されると思ってるぶんたちが悪い』

「……そりゃ、同感だけど。だからって、殺していいって

事になんないし。大体お前、いじめられてないじゃん」

一呼吸の沈黙。

「いじめられてたのか？」

怒りが胸に沸騰する。

もしそうだったら、許せねえ。

『……道連れで人を殺したいとは思ってる』

キレた。

「なんなんだよ、さつきからおもわせぶりの発言ばかりやがって!!」

衝撃が壁に炸裂、廊下が振動する。

「ちよつ兄貴、なにしてんの!? 壁に穴開くしやめてよ!!」
台所から顔を出した妹が驚いて叫ぶ。

怒りに任せ壁を蹴り、肩で息をしながら受話器にむかって怒鳴り散らす。

「大晦日に変な電話かけて寒い廊下に人立たせつばなしにしたあげく人殺しちやいけない理由教えるとか道連れにしたいとか意味不明な事ぐだぐだ言いやがって、お前のせいでラスボス戦に集中できねーだろ、言いたことあんらはつきり言えって俺バカだからわかんねーよ!!」

「暴れないで兄貴、家沈む!!」

『俺を止めにこいよ』

「寒いからやだよ!!」

間髪いれず言い返す。

受話器がちよっと黙る。

「仕掛けられてもない爆弾解除しに冬休み中の学校にのこの出かけてく間抜けに見えっか俺が、たしかにバカだっどお前の手の上で転がされるほどバカじゃねーつての！てか、今何時だと思ってる？ もうすぐ七時だぜ、七時！死ぬよ！ 間違いない今外でたら凍え死ぬね、行き倒れだね、ガンガン行くより命を大事にしたいゆとり世代の俺としちゃ断固拒否!!」

『あー……うん、やつば信じないか。言葉だけじゃ駄目か。電話で説得できると思っただけど、信用ないな、俺。ええとき、じゃあテレビ点けてみて。待て、ネットのがはやいか』

「あ、メール。ユキからだ」

「そばゆでてるときくらい携帯おいとけよ、鍋におつことしたらどうする」

「だいじょうぶだよ防水加工してるし……え？」
妹の顔が凍る。

「兄貴、ユキの兄ちゃんと同じガツコだよね？」

「沢田か。知ってるけど、急にどうした」

沢田聡史、クラスは違うが同じ学校の一年生で部活の後輩でもある。妹同士が親友でうちとは家族ぐるみの付き合い

だ。

「沢田になんかあったのか？」

「違う、ユキの兄ちゃんがさつきから兄貴の携帯にかけてるけど繋げなくなつて……てんばつてるみたいでさ。今ユキの携帯借りて、あ、来た！」

唐突に携帯が鳴り出す。

電子合成のメロディを奏で、妹の手の中ではねる携帯をひつたくる。

「もしもし？ 透だけど、今取り込み中だからあとに」

『マンションが爆発したんです！』

「え？」

全身から血の気が引く。

電話から聞こえてきたのは、たしかに後輩、聡史の切羽詰った声。

『数学の梶、先輩も知ってるでしょ？ マンションの部屋に宅配で時限爆弾届いて、それが爆発したとかで、大騒ぎですよ！ 今すごい勢いでメール出回って……噂流れてるんですけど、聞いてませんか？ 三十分前かな、消防車と救急車がきて、すごい騒ぎで。俺、今、現場にいるんだけど』

「待て待て」

梶。数学教師。二十代後半とまだ若く、ルックスもそれなりに良いが、鼻根が激しくて嫌われ者だった。

俺も嫌いだった。あの日からは、特に。

麻生譲は梶のお気に入り生徒だった。

『そりゃ俺も梶センセはあんま好きくなかったけど、誰が爆弾なんて……聞いた話じや重傷で、病院に運ばれたとかで。今、マンション前にいるんだけど、たまたま妹と出かけて。うちの母ちゃんドジで明日雑煮にする餅買い忘れて、至急スーパーまで買い物頼まれて……帰りすごい勢いで救急車とパトカー走つてくの見て、野次馬で……来てみてびっくりして。先輩に知らせなきゃって。今、友達がどんどん現場に合流してるんです』

聡史は興奮しきつてる。声がうわつっている。現場を肌で感じる高揚感が伝わってくる。

まわりがざわついている。野次馬の喋り声に混じって聡史の同級生だろう甲高い声がひっきりなしに響く。被害者と顔見知りだつて自慢してるんだろか？ ……吐き気がする。狼雑に混じりあういきれ人声を切り裂けたたましいパトカーのサイレンから殺気だつ臨場感が伝わってくる。

爆弾。

爆発。

学校関係者。

偶然で片付けるには、共通点が多すぎる。

『先輩、俺』

「悪い聡史、あとでな」

妹に携帯を突っ返し、受話器にとびつく。

『……………な？』

笑いを嘔み殺すような声が出た。

沸々と込み上げる愉悦をひた隠しにするような、おぞましい、声。

直接聞かなくてよかった。受話器が濾過し、毒が薄れていたからまだ耐えられた。

心臓の鼓動が高鳴って、体温が上昇して、受話器を掴む手が小刻みに震える。

「お前か。梶んちに、爆弾送り付けて」

『あいつ、死んだ？』

「ーっ!!」

こめかみの血管が切れそうになる。

俺の友達は、人の命をこんな、軽く扱うようなヤツだったのか。

その事にショックを受け、目の前が暗くなる。よろけた妹から妹が小さく叫んでのがれる……妹甲斐がねえ、せめて支えてくれ。

妹に見捨てられた俺は、そのままバランスを崩し、背中から壁に衝突する。

「……………マジなのか。学校に爆弾仕掛けたって」

もう一度、問いたです。

心臓の音がうるさい。耳裏で鼓動が響く。壁によりかかってなんとか体勢を保ち、受話器を睨みつける。

『タイムリミット0時。新年の幕開けと同時にドカン』

「今、どこにいる」

『学校』

自殺の予告にほかならない。

受話器から響く声は、良心の呵責などという不純物を一切含まず、あくまで軽い。

顔の見えない友達は何舌に上機嫌に自分の手柄を語る。

『学校に仕掛けた爆弾は梶んちに送り付けたヤツの数倍の威力、よって被害も数倍。校庭にクレーターできる』

「場所は」

『甘いよ秋山、それ教えたなら楽しみがなくなる。推理小説をずるして後ろから読むような反則行為。ミステリ好きなら秋山ならそれがどんなに邪道かわかるだろ』

「小説と現実をごっちゃにすんな!!」

『とりえず学校内。学校のどっかに仕掛けられてる。爆発を防ぎたかつたらタイムリミットまでに見付けだして解除するしか……』

力一杯受話器を叩ききる。

「出てくる!!」

「こんな時間にどこいくの兄貴。そばのびるよ」

「コンビニ！ ジャンプ立ち読み！ すぐ戻ってから戸締りしとけ、貧乳襲う物好きだっていんだから！」

顔を赤くしてぎゃあぎゃあ喚く妹に背を向け転げるように階段を駆け上がり部屋にとびこみ、ベッドの上に投げ出した携帯をひったくる。回れ右したはずみに床でのたくるコードに躓き腹立ち紛れにコントローラーを蹴り飛ばす。

転げるような勢いで階段を駆け下り玄関に直行、踵の潰れたスニーカーに足突っ込み、騒々しく戸を開け放つ。

「バカ兄貴寒いって、はやく閉めて！」

「うっせ貧乳、文句は搾乳できるくらい乳張ってから言え!!」
「ちよっ、妹に搾乳とか最低なんですけどセクハラなんですけどスケベ兄貴、もう帰ってくんない?」

罵声を背に外に出、庭にとめといたママチャリに飛び乗る。
「大晦日まで搾乳とか貧乳とか兄貴の頭ん中はエロ一色で妹として大変らしい」と大げさに嘆く声にせかさされ、自転車のサドルに跨り、ハンドルを握る。

渾身の力でペダルをこぎ、弾丸の勢いで寒風すさぶ道路に飛び出す。

ナイフのような風が髪をなぶり顔を切り、そこで初めてコートもひっかけず、学校指定のださいジャージ姿で外に出たのに気付く。

時すでに遅し。

秋山透は、これから友人、麻生讓をぶん殴りにいく。

「ちくしょーなんでうちのガツコ坂の上にあるんだよ、坂の上にあつていいのは雲だけなんだよ!!」

耳が痛いくらいの静寂をかき乱すのは自転車の車輪が回転する音、前後上下運動するペダルの軋み、俺自身の浅く弾む息遣い。

ずずつと涙を噉る。

さつきまで民家やマンシヨンの明かりが漏れ日常の延長にあつた世界が、すっぽり袋を被せたような闇に覆われる。

俺の通う高校は辺鄙な場所に建つてる。

だから続く坂のてっぺん、丘の上の孤立した立地。

実家から片道二十分、往復四十分の距離は結構な運動になる。

志望動機は単純明快、俺の成績で行ける中で一番学費が安く近い高校を選んだのだ。

母子家庭で贅沢いっちゃばちがあたる。

お袋は一生懸命働いて俺と妹を育ててくれた。とにかく学費の事でお袋に迷惑かけたくなつた。お袋は「子供が気色悪い遠慮すんな」と怒るだろうけど、俺にだつてゆずれな

いもんがある。ああ、孝行息子だよな、なんて自画自賛してみた。

勉強強の末受かつた時は「勉強嫌いのあんたにしちや上出来だ」とお袋も喜んだ。その後「で、カンニングした子にはお礼言つたの?」とこつそり耳打ちしてきた時はがっかりきた。息子のカンニング疑うつて親としてどうなの、それ。俺がいくら「実力だつて! この目見ろよ!」とむきになつて釈明しても「はいはい。あ、夕飯肉じゃがなんだけど、お醤油切れてるから買ってきてくれる? あんたのツケで」と目を逸らし気味に流された……ついでにちやっかり買ひ物も頼まれた。

信用ねーし、俺。

長男なのに、少しでも家計の足しになればとバイト代まめにいれてるのに、俺つてばどうにも我が家における弱肉強食ピラミッドの底辺に位置する気がしてならない。

生意気さかりの妹はうざいを連呼して俺を蹴つ飛ばしている。

俺が入つたあとの風呂とトイレは断固拒否する徹底ぶりだ。思春期の女子特有の潔癖症と割り切ろうにも兄は哀しい。我が家じゃ女の方が強いのだ。男は理不尽に虐げられるさだめだ。親父も案外それがいやで逃げ出したのかもしれない。

お袋と妹にカンニング前提不正入学を疑われはなはだ本意だが、俺なりに楽しい学校生活を送ってきた。

麻生讓、あいつがいたからだ。

八分目、ラストスパート。

ぐつとペダルを踏み込み、心臓の耐久に挑む。

急回転するタイヤがアスファルトを削る。

余力を振り絞り、体ごと前に押し出すようにして坂を上る。

顔が赤い。体が火照る。

ちんたら歩けば片道二十分の距離を十分に短縮したのだ、

よくやったほうだ、俺は。

吐く息が白く溶ける。

ジャージが包む全身にびつしより汗をかく。

茹で上げられたように体が熱い。

学校が見えてくる。

ペダルを踏むごと距離が近付き、影がでかくなる。

胸が苦しい。肺が苦しい。汗を吸ったジャージが手足に重

く纏わり付いて邪魔つけだ。

だぶつくジャージの中で腕が泳ぐ。自転車が今にもばらば

らに分解されそうな盛大な軋み音をあげる。頼む、学校ま

でもってくれと切に祈る。目を瞑り、ペダルを踏む。車輪

が回る。鋭利な風と一体化して夜道を疾駆する。高速で回る車輪の音、握り締めたペダルの硬く無機質な感触、流れていく景色……五感がひどく冴え渡る。

ゴールが近い。もうすぐそこだ。頑張れ、俺。自分に負けるな。

「金輪際インドアオタクなんて言わせるか！」

ゲームと読書が趣味のネクラオタクとなめたら大間違いだ、

俺はやる時はやる男なのだ。

敬え妹よ、惚れる女ども。

終盤の傾斜を啖呵とともに乗り切り、頂上に出る。

ハンドルを切り、急ブレーキをかける。

体重をかけペダルを踏めばタイヤが砂利を噛んですべり、

慣性の法則で振りおとされそうなのをハンドルを掴み堪える。

重力に蹂躪され髪が乱れる。

ジャージの裾がはためく。

ハンドルを握り締め、歯を食いしばる。

タイヤが地面を噛み、摩擦であとを刻んでようやくく止まる。

「……………危機一髪、門に激突死するところだった」

すぐそこに迫った鉄門を横目で一瞥、肝を冷やす。

自転車を下り、しっかりと錠のおりた門に歩み寄る。

冬休みまつただなかとあり当然門は施錠されてる。……………仮

に開けつ放しにといたところで、辺鄙な丘の上の男子校に好き好んで盗みに入る泥棒もいないだろうが……待て、盲点を突くつて案もありか。

「……たんま。まーた推理小説読みの悪い病気がはじまつてるつて。今それどころじゃねーし、あとあと」

ちよいと気を抜くと勝手に妄想が始まっちゃうのが俺の悪い癖だ。推理小説読みの呪われたさがともいうが。

自分に突っ込みをいれ、門周辺を慎重に見回る。

ざつと見たところ、侵入者の形跡はない。天才と名高い麻生のことだ、俺程度に勘付かれるようなヘマはしないだろう。背伸びして門の向こうを覗き見る。冬休み中、閉鎖された学校は闇が濃い。警備員の姿も見当たらない。

「……陸の孤島か」

口に出し、その響きにちよつときめく。

「くだーから、ときめいちやだめだつての！ 学校に爆弾仕掛けられて爆発するかもしれねえ大変な状況わかつてるのか俺、陸の孤島とかクローズドサークルとか嵐の山荘とか思い浮かべて胸高鳴らせてる場合かよツ、殺人事件がおきるわけじゃあるまいし、ああでもクローズドサークル物の名作つてアガサ・クリステイのそしてだれもいなくなるだよな、一人ずつ追い詰められていくスリルがたまんねーし最後の仕掛けに仰天、国産ミステリだつたら横溝は古典

で最近の掘り出し物は月光ゲーム……」
まただ。

言つたそばから妄想が暴走し、饒舌に語り始めていた。猛烈な自己嫌悪に襲われ、頭を抱えしやがみこむ。

駄目だ。だめだめだよ俺。ここまで駄目なヤツとは思わなかった。ほんのちよつとだけ、自分に愛想尽かしたくなつた。

麻生はこんな俺のどこを信用したんだ？

「ーよし」

深呼吸で気を取り直し、立ち上がる。

警備員がいらないなら都合だ、見咎められる心配もない。不審者扱いで追放されたらプライドの危機だ。

頬を叩いて喝をいれ鉄門に接近、ジャージの長袖をまくる。

「つと」

地面を蹴り、反動をつける。

鉄門に手と足をかけよじのぼる。高さ3メートルほど、落下しても死にやしない……が、怖い。俺つてばちよつと高所恐怖症の気あるのか？

「冷てつ」

鉄棒を握った瞬間、手がびりつとした。

できるだけ下は見ぬよう注意をそらしつつ、運動音痴なりに苦勞してよじのぼり、てっぺんから半身を乗り出す。

意を決し、飛び下りる。

「でっ!？」

かつこよく飛び越したつもりがぐらつき着地失敗、もんどりうって地面に転がる。

運動音痴がむりするところがなくない。思い出した、俺はねっからミステリ小説とゲームを愛するインドア派でした。妹に「兄貴つてオタク? きもっ」と白い目で見られてるんでした。

夜の学校で人目を意識するのは愚の骨頂。

「……バカじゃねーの。門のてっぺんから飛び下り自殺未遂つて、空気の視線でも意識したのかよ……」

転がった拍子に含んだ砂利をべつと吐き出す。

ジャージが汚れた。ジャージでよかつた。咄嗟に背中からおちたせいで、さいわい怪我はない。

とりあえず、誰もいなくて安心。こんな恥ずかしいところを見られたら本気で退学を考えねば。

ジャージに付いた泥を無造作に払い、立ち上がり、あたりを見回す。

電話が鳴った。

「!」

咄嗟にジャージのポケットをさぐり、出がけに突っ込んできた携帯をとりだす。

携帯が奏でる荘厳なメロディ、こないだ設定した古畑任三郎のテーマ。

夜中、校庭にひとりぼっちで聞く古畑任三郎には、若者の健康な心臓を一瞬止める効果があると初めて知った。

「もしもし」

『秋山、今転んだ? もしくは飛ばうとして墜落した?』
ばれてやがる。

笑いを噛み殺した麻生の指摘に、カツと顔が火照る。

「おまつ……え、なんで知ってんの!？」

『飛ばない秋山はただの秋山だ』

「見てやがんのか!? どこで!? 畜生卑怯者でてこい!!」

『すっげうける。一人でかつこつけるからだよ。普通にぶらさがって着地すりやいいのにてっぺんからダイブ、しかもスライディングつて、体張つて笑いとりにきて……空気の視線でも意識してんの? ばかなの?』

「ダイブしたらH2Oが無色透明のやさしきで受け止めてくれるとおもったんだよ!!」

やけになつて叫べば携帯の向こうで堪えきれず笑いが炸裂、顔がますます赤くなり、携帯を持つ手がわななく。

「……本当に性格悪いな。人の失敗、隠れてこっそり見てやがんのか」

『どこにいるかあててみるよ。得意なんだろ、推理ゲーム』

携帯を耳にあてつつ、ゆつくりと門から離れ、校舎に足を向ける。

夜の校庭は静まり返り、闇に沈む校舎はおそろしく巨大に見える。

立地こそ辺鄙だが、この学校はなかなか設備が充実している。

夜間ライト付きの野球場、競技場はおろか屋内運動場までも併設され、昨年改装工事を終えたばかりの新校舎が闇の中に豆腐のように鎮座している。

お袋と妹がカンニングを疑うのもむりない、俺も合格を知った時は一生分の運を使い果たしたと思った。

今だから告白するが、だめもとで受けてみたのだ。

この学校には成績上位者に奨学金制度がある。

入学試験で上位十位以内に入った者のうち、年収が一定未満の貧乏家庭の生徒は、学費を免除される。

それめあてで受けて、まぐれで受かった。

俺は入学した時点でばったり力尽きた。以降坂道を転げ落ちるようにおちこぼれ街道一直線だ。

………自分語りはいい。

くだらない感傷に浸ってる暇があるなら、麻生をさがせ。携帯を持たぬ方の手で苛立たしげにジッパーをさげ、ジャージの前を開ける。

ジャージの下には「シヤツを羽織ってる。こもった熱が逃げ、寒くなつたらまたジッパーをあげればいい。便利。ジャージつて実は防寒に優れた万能服かも。

携帯を右手に持ち、きよろきよろあたりを見回しながら校舎へと通じる道歩く。

植え込みの影にひそんでるのか。教室の窓から見下ろしてるのか。

目に映るもの、なにもかもが疑心暗鬼に彩られる。一步踏み出すごとに緊張が強まり、焦慮が募る。

スニーカーが地面を叩く。靴音が空虚に響く。

「外じゃないな。風の音、葉擦れの音がしない。お前はいま、正門が見下ろせる場所にいる」

必死に頭を働かせる。正門が見渡せる場所となると限られてくる。

正面に聳える校舎を仰ぐ。

健康的な昼の光の中ならともかく、冴え冴え冷え切った闇の中に聳えるその姿にや、愛校心にとぼしい俺さえ圧倒する不気味な威容がある。

ちぎれがちな息を吐きながら聞く。

「正面校舎の三階？」

答えはない。

なにより雄弁な肯定の証。

「……………あたりだ」

確信をこめ、呟く。自然、俺は微笑んでいた。

この距離まで近付けば、闇に溶け合った校舎の輪郭がはっきり浮き上がって見える。

麻生。

間髪いれず駆け出していった。

一冊の本がとりもつ出会いもある。

俺の場合は人間失格だった。

「募金めあてで学校くんな垢風呂浸けの貧民のクズが」

「……………わー心扶る暴言」

……………これだからブルジョワジーは。

暇をもてあますと金持ちはろくなことをしない。よわいものいじめとかよわいものいじめとかナンパとかよわいものいじめとか。

そして俺ピンチ。

時は放課後、場所は日のあたらぬ図書館裏。

敷地の北側に位置し、壁が日光を遮るせいで昼なお薄暗く、微がはえた図書館裏にたむろうすさみきった学生が数人。

ふやけきったのから紫煙を燻す新しいのまで吸殻がまだら

に地面にへばりつき、老人斑の浮かぶ壁には根性焼きのあとが点々と咲く。

共学だったら確実に使用済みコンドーム捨て場になつて

にちがいない。足元には俺の想像を裏付けるように湿気を吸つて膨張しきつたエロ本がおっこちてる。

なんとまあ退廃し心すさむ不良のたまり場。

俺をこのホットスポットに案内してくれた張本人は、目の前にいる。

図書館の壁を背に辟易した俺と向き合い軽薄に白い歯を見せ笑つてる。

にやにやと角度をかえ、右へ左へ首傾げ、しつこく顔をのぞきこむ。

「また図書館でひとり寂しく本読んでたのか？ ネクラだな」

「ほつとけよ。本読んでるとお前になにか不都合あんのか？別に迷惑かけてねーよな」

挑発的に切り返す。

「待ち伏せしてたの？ ひよつとして俺、人気者？ 告白するなら時と場所えらんでほしいよな。お前さ、女から演出下手って言われね？ 情緒もへつたくれもねーセックス

するんだらうな、ろくにキスもせず突つ込むような」

「なつ……………！」

「あ、ごめん、童貞だった？」

相手が凍りつく。

取り巻き連中が気色ばむ。

……地雷を踏みまじったらしい。冗談で場を和ませようとしたのが裏目に出た。

一気に空気が硬化する。

靴を盾に後退しつつあつちへこつちへ油断なく視線をわりふり敵状視察、戦力差を計測。

敵は六人、俺は一人。

多勢に無勢、まともにやって勝てるわけない。

新旧の吸殻とアンブルがとつちらかった地面を踏んでじりじりさがりつつ幼稚な挑発にのせられいきりたつリーダー格をまじまじ観察、脳内で名前を検索するも顔と合致しない。

二年に進級してそろそろ一ヶ月が経過する。

同級生の顔と名前を把握してもいい頃合だが、生憎と関心の薄い相手の顔は覚えられないたちなのだ。

何事もそうだが、本人にやる気がないと一向に上達しないものだ。

俺の記憶力が低迷気味なのは同級生にさらさら興味がないからだ。

だがお互い様だ、クラスメイトも俺を無視してる。

無視だけなら害はない。めんどくさいのはこういう手合い、徒党を組んでちよつかいかけてくる物好きな暇人どもだ。

やれやれ、せっかくの青春くだらないことで浪費すんなよ。俺があと二十歳年食ってたら車座で説教タイムだよ？

しかもこういう連中に限って群れなきやなにもできない腰抜けときた。

心の中で舌打ちひとつ、つまさきで地面をさぐりつつ間合いをとる。

「……………調子にのるなよ、お情けでいれてもらった貧乏人のくせに」

ほらきた。

名前も知らないそいつ呼びにくいな、よし、面長だからボルゾイと呼ぼうが勝ち誇ってあげつらう。

「知ってるんだぜ。お前んち、母子家庭なんだろ。父親が女作って蒸発して、母親と妹とぼろい借家で三人暮らしなんだろ。同情するぜ」

俺はため息を吐く。

「……前からふしぎだったんだけど、そういう噂、どっから出回るわけ？」

「同じ学校のやつから聞いたんだよ」

「さいですか」

納得。噂好きなおしやべりはどこにでもいるもんだ。

弱みを掴んで得意満面、ボルゾイが人を踏み台にした安い優越感に酔って笑う。

「しけてるよな。母親、スーパーの惣菜売り場に勤めてるんだっけ？ お前んちの夕飯、毎回スーパーの売れ残りってほんとか？ 育ちざかりなのに可哀相に、だからそんなひよろひよるなんだな。栄養失調なんじゃねえの」

「太らない体質でね。羨ましいだろ？」

あまりこたえてないと見るや不満げに馬鹿笑いをひっこめる。

無然とした相手を白けた目で見返す。

この場を無傷で切り抜ける対処法を考える。

一、倒す。

二、逃げる。

三、ごまかす。

よし決めた、三。博愛主義者の俺としちゃ話し合いで平和的解決といきたい。

「俺が気に入らないのは知ってる。だつたらお互い無視しようぜ、そっちのが無駄なエネルギー使わずにすむだろ。教室でも見えないふり、いないふりだ。実際そうしてんだろ？

放課後になった途端そろそろお仲間引き連れて積極的にデー

トの誘いなんてツンデレすぎ。男のツンデレ需要ねーよ。

可愛い女の子なら萌えっけどき、ボルゾイじゃ……」

「は？」

「なんでもね。忘れて」

うっかり口が滑った。ごめんボルゾイ、それ俺の心の中だけのお前のあだ名。

饒舌に説得を試みる俺に対し、空気が次第に険悪になっていく。

ひよつとして、墓穴掘った？

失言を悔やむも、遅い。

ボルゾイ一同が噛みつきそうな顔で俺を睨む。だから苦手なんだよこいつ。

包囲網が狭まる。

不興が顔に出る。

「……いじめかつこ悪い」

「なんでいじめがなくならないか知ってるか？ 楽しいからだよ」

堂々開き直る。ちよつとひく。このボルゾイ、性根が曲がってらつしやる。

よわいものいじめ大好きと公言してはばからないボルゾイに付き従う同級生も同類か、口々に相槌をうつ。

ボルゾイが大股に踏み出す。

鞆を立て守りに入り、目だけ忙しく動かし布陣の綻びをうかがう。

図書館裏はリンチに最適の場所、校舎からは死角。教師も生徒も滅多に来ず、邪魔が入らない。図書館に用事目的のある人間以外、通りかかることもない。校内にいくつかわる負の磁場のひとつ。旧校舎トイレの一番奥や屋上に通じる踊り場も該当する。こういうところには怨念がこもりやすい。恐喝被害にあつた生徒の無念がどんより染み付いて空気を重くするような気がしてならない。

壁に背中をもたせ、ボルゾイの肩越しに誰か通りかからないかと一縷の希望をもつ。

私立御手洗高の図書館は敷地の北側に建つ。

昭和から現役で生き続ける建物は愛想のかけらもない鉄筋コンクリート製、時代を経た外壁は黒ずんであばたの染みができている。

皮膚病患つた壁の一面に煙草をもみ消したあとが残る。

無秩序で不健全な荒廃。

ここじゃ過去何度も同じことが行われ涙を呑んだ生徒がいるのだろうと想像を逞しくする。

俺を取り囲み壁際に追い詰め、ボルゾイが唸る。

「場違いな貧民がいると学校のランクが落ちる。わかったら、とつとと出てけ」

「やだね」

即答する。

ボルゾイの顔が引き攣る。取り巻き連中が詰め寄る。

鞆を小脇に抱え、用心深く腰をおとし、逃げる準備を整える。

若干、緊張する。

小学校時代から何度も修羅場はぐりぬけてきた。ガキの頃はよくいじめられて泣き帰つたもんだ。今はもう泣かない。泣く暇あつたら突破口さがす。いつまでも甘つたれのがキじゃいられない、自分のケツは自分で拭くのが信条。冷静に、冷静に。

小さく息を吸い、心を落ち着ける。

動揺を悟られるな。調子づかせるのは癪だ。弱みにつけこませるな。

背中に図書館の壁があたる。

追い詰められたと実感、腋の下を冷や汗が流れる。

「ほつとけよ。お互い不干渉でいこうぜ」

「そのなめた口が気に入らないんだよ」

「悪いな、生まれつきなんだ。そういうお前こそ俺みたいなネクラに構つてるひまあんなら中間にそなえて勉強したら？ それとも何、俺にちよつかい出すのは、お勉強のストレス解消なわけ。なるほどね、見るからに余裕なさそうな顔してるもんな」

「ーんだと」

ばか、怒らせてどうする。

難癖つけてくんのを勝手に回る口先で適当にあしらえば、ボルゾイの目に濁った油膜が張る。

「一人で気楽にやつてる俺が羨ましいとか？ 小学生の女の子みたいにぞろぞろ連れ立って便所にいく目立ちたがり屋じゃ、自由行動もむずかしいよな」

そこで一呼吸おき、ボルゾイの後ろに控えた取り巻き連中を哀れむように見回す。

「なあお前ら、お互い監視して楽しい？ お互いの行動縛って楽しいか？ この暇人はともかく、今日ほかに予定あったんじゃないの？ 待ち伏せして俺にヤキ入れるよか大事な用事がさ。楽しみにしてたゲームの発売日とか楽しみにしてたアイドル写真集の発売日とか楽しみにしてたミス터리新刊の発売日とか……最後のはねーか」

口の中だけで取り消す。
ボルゾイの顔が怒りに充血、眇めた目がぎらつく光を放つ。凶星をつかれ取り巻き連中の鼻の穴もふくらむ。

「友達ひとりいねーくせに、強がつてんじゃねーよ」
陳腐な切り返しと貧困な語彙を囓う。

「保護色は弱虫の性質。お前ら、一人が怖いから群れるんだろ。文句あるなら一人で来い」

俺の言葉じゃない、最近読んだ本のパクリ……引用だ。

だが、こいつらにはきいたらしい。集団でいじめなんてする連中は大概そうだ、裏つ返せば劣等感にこりかたまってる。そこを突かれると脆い。

ボルゾイが無造作に手を伸ばし、俺の胸ぐらを掴む。乱暴に掴まれ、喉が絞まり息が詰まる。

首を圧迫され喘ぐ俺の至近に顔をよせ、ボルゾイがにやりと笑う。

「自分の立場がわかつてねーみたいだな。思い出せてやろうか」

目が残忍な悦びに濡れ光る。

俺の胸ぐらを掴み、壁に押しつけ、ボルゾイが顎をしゃく

る。
取り巻きの一人が蓋を開けた鞆を掲げる。

ボルゾイが鞆に手を突っ込み、中身をあさる。

「なににする気だ？」

まだ質問する余裕があった。

制服の背中にしこる壁のざらつきが不安をかきたてる。

ボルゾイが鞆から手を抜く。

その手が握るものを見て怪訝に目を細める。

シャープペンシル。

「こないだドラマで見て、刑事がやってたの、試してみた

かったんだよな」

ボルゾイの舌なめずり。興奮の面持ち。嫌な予感が苦い唾と一緒にこみあげる。

さすがに戸惑う。殴る蹴るの単純な暴行じゃない。一発二発殴られるくらいなら我慢しようと腹をきめたが、どうも様子がおかしい。

ボルゾイはにたつきながら指にはさんだシャーペンを回す。シャーペンの芯先に目が吸い寄せられる。

「ー！ くつ、」

逃げようとした。

胸ぐら掴む手をふりきり、嫌な予感に背を向け、その場から一目散に逃げ出そうとした。

駄目だった。六対一じゃ不可能だ。逃げようと身をよじつたそばから、ボルゾイのお友達によつて肩ごと壁に押しえ込まれる。

「やつとむかつく笑いが消えたな」

耳元でねちつくく嘔き、俺の手をとり、むりやりこじ開けた人さし指と中指の間にシャーペンをあてがう。

取り巻き連中のにたにた笑い、ボルゾイの嘲笑、図書館裏の黴臭く湿った暗闇……

シャーペンを挟んだ指ごと絞り上げる。

「!! 痛っあ、うぐ」

骨が軋み擦れる激痛に仰け反る。

知らなかった。こうされると痛いマジ痛い。

指にシャーペン挟んでぎりぎり締め上げるだけなのに凄く痛い碾き臼のように骨が擦れてめちやくちや痛い痛いつて!?! 体をふたつに折り曲げ超音波じみた悲鳴を発し身悶える俺に、ボルゾイと取り巻きがここぞとばかり罵倒と嘲笑を浴びせる。

悪乗りした連中が携帯をとりだしカシャカシャやり始める。記念撮影か、と皮肉な思いを抱くもすぐ霧散、シャーペンに固めの刑に身も世もなく暴れる。

「痛、ちよ、たんま、これ洒落になんねっ……」

「身のまわりのもんでできる手軽な拷問のお味はどうだ?」
嗜虐的に唇なめるボルゾイの顔に唾吐きたいがその余裕もない。

指の股に挟んだシャーペンと骨が擦れひび入りそうな激痛にたまらず呻く。

スニーカーの靴裏で壁を蹴り激しくばたつく。

「大げさだな」

「ちよつと泣いてねこいつ。目尻がぬれてる」

「かつこわり」

「笑える」

「写メつとこうぜ」

「あとでクラスに回そ」

「はいポーズ……んだよ、につこり笑えよ。固いもん突っ込まれて気分出してよがつてるくせにサービス悪いな。そんなんじゃ読者アンケート一位とれねーぞ」

「どこに投稿するつもりだよ？」

くつちやべりがてら携帯かざしカシヤカシヤ連続でシャッター切る。くそ、人の痛がるさまがそんなに面白いのか？ なら代わってやるよ喜んで。きそつて携帯を突き出し写メを撮る……悪趣味な奴ら。

目に涙が浮かび視界がくもる。

壁が遮る日陰に嘲笑と野次が渦巻き、三半規管が酔う。

「マジ痛そう。こんなちやちなもんでそこまで痛がれるのか」

退屈げに人の指を軋ませながらボルゾイが呑気に感想を呟く。

「ドラマの犯人がこれされてすっぱー痛がってたから、やってみたかったんだけど」

「——お、まえさ、番組の最後に出るよいこのみんなはまねしないでねつてメッセージ見てねーの!？」

「このドラマはフィクションであり実在の人物団体名とは関係ありませんつてテロップなら見飽きてっけど」

おもいつきり顔を近付け、ぬるい吐息を絡めるようにして

言う。

「痛みはフィクションじゃないから楽しいよな？」

こいつ、ちよつといかれてる。サドつ気全開だ。

畜生、厄介なやつに目えつけられた俺も。つくづく自分の不運が呪わしい。

「痛つ……い、いかげんにしとけよ、指折れる……」

「へし折つてみるか」

指がみしみし軋み充血、毛穴から脂汗が噴き出す。

しよっぱい涙を噛み仰げ反るように悶絶、降参を表明しぎらつく壁を背中打つ。

「そんなくらいにしとけよ伊集院、マスかけなくなったら可哀相だろ」

右のニキビ面が野次をとばし、取り巻きがどつとうける。

どうでもいいがボルゾイの本名は伊集院らしい。いかにも金持ちっぽい名前。てか、生まれてこのかた十七年、初めて漫画のキャラ以外に伊集院なんて苗字に出会ったよ実在したんだと妙に感動する。

「く伊集院といや、大介だよな」

「は？」

唇を噛みながらの俺の言葉にボルゾイこと伊集院くんが不審な顔をする。言った俺がばかでした。こんな状況でさえなけりゃ好きな探偵と同じレア苗字と出会った事を素直に

喜んだのに。

くそ、痛すぎて涙が出る。

俺の泣きつ面をゆびさし取り巻きが盛大に野次る。

知らなかったこれすごい痛い、今度妹に教えてやろう。シャーペンってこんな危険物だったんだ。だめじゃん。凶器じゃん。人に使用しないようにって注意書きしねーと。

「——つあー！」

徐徐に握力増し指をひしく。

第二関節に挟みこまれたシャーペンが摩擦圧搾で指の骨を削る。

濡れるものもがくように靴裏で壁を蹴りつけ、激しくかぶりを振って抗う。

あがけばあがくほど哄笑が大きくなる。

足元に鞆が落下、蓋が開いて中身がぶちまかれる。

昨日買ったばつつかでカバーも外してない文庫本が地面に滑り出る。

やべ。

反射的に手をのびし拾おうと前に泳げば、ボルゾイがまってましたと足を払う。

「目障りなんだよお前」

指が攣る痛みに絶叫を絞る。

激痛に真っ赤に蝕まれゆく意識の片隅で地面に放り出され

た文庫本を気にかける。

畜生、まだ三分の一も読んでねえのに！

悔し涙で視界がますます歪む。

かくなるうえはと覚悟を決め、深呼吸する。

「俺はどうなつてもいい、だから新刊は助けてくれ！」

「はあ？」

ばつと顔を上げ、しがみつかんばかりの勢いで懇願すれば、ボルゾイが眉根をよせる。

「まだ三分の一しか読んでないんだ、ちようどいいところなんだ、すつげ続き気になるんだ！ ようやく第一の殺人がおきて密室で被害者の義兄と恋人が言い争い始めて、探偵役がそのとばつちり食ってピアノ線で首しめられて、助手が探偵救おうと高枝切りバサミ持ち出して、最ッ高に燃える展開なんだよ！ 詩情と痴情が交錯するメタ・ミステリーの新境地って前評判高くて発売楽しみにしてて昨日手に入れたばつつかなんだ、頼む本だけは見逃してくれ、没収されたら探偵と助手の恋の行方と真犯人の正体が気になって悶々として夜も眠れね」

二階から太宰治がおちてきた。

「ぶつー！？」

ボルゾイの顔面にぶちあたった本のタイトルは――

『人間失格』。

「なっ」

ボルゾイが顔面に本の直撃を受け沈没、取り巻き連中が驚愕。

足元でシャーペンが跳ねる。

見上げた光景は網膜に焼き付き、後々まで鮮烈に記憶に残った。

図書館二階の窓から宙へと身を躍らせた学生。

人間よりは猫科の動物に近いおもいきった跳躍、綺麗な放物線。

放物線に伴い等身大の影が地面を移動する。

下から仰ぐも、眼鏡と日陰が邪魔して表情が見えない。

そいつは軽々とボーダーラインを飛び越した。

高所恐怖症がちびつてあとじさりそうな高さから躊躇なく飛び下りた。

数メートル下に地面があるとわかっててもなかなかできることじゃない。

潜在的な恐怖心とか自衛本能とか理性の監視下じゃ乗り越えられない一線がある。

墜落の危険性だつてあつた。必ず成功するとも限らなかつた。

打ち所が悪けりや死んだかもしれない。

死ななくても、骨の一・二本を折つたかもしれない。

図書館の窓から飛び出した人物は俺と同じ学ランを着ていた。

背は俺よりちよつと高く、しなやかな中肉の体つき。

手足のバランスとすつきり伸びた姿勢がとてもよく、僅かに斜に構えた立ち姿がひどくさまになる。

特別な雰囲気があつた。

登場と同時にギャラリーの心をかつさらつちまうような、そこにいるだけで透명한空気の色まで変わるような、選ばれたものだけがもつ特別な雰囲気。

目をはなせない危なっかしさと人を食う豪胆さとがあいつの中で静謐に均衡をとっていた。

赤くなつた指を押さえ、苦痛に呻く俺の前に立ち、ボルゾイをリーダーと仰ぐ同級生と対峙する。

「てつめえ、いきなり何しやがる！？」

鼻っ柱を赤くし跳ね起きたボルゾイが憤激し怒鳴りちらす。図書館の裏側、昼なお薄暗くじめじめした場所に颯爽と降り立った学生は、しごく落ち着き払って答える。

退屈そうな声で。

「『或る阿呆の一生』か『白痴』の方がよかった？」

俺に背中を向け。

「お前……」

突如恐喝の現場に舞い降りた闖入者に絶句。

手の痛みがひくのを待ち誰何の声を上げれば、ゆっくりと振り向く。

一回も染めたことない清潔な黒髪が揺れる。

細身のフレームの眼鏡のむこう、剃刀の如く伶俐で無感動な双瞳がこつちを見下ろす。

目が合った。

聡明な切れ長の双眸が地面に移動、カバーのはずれかけた文庫本にとまる。

カバー下にちらつくタイトルを一瞥、意外な場所で意外なものに出会ったように目を細める。

優雅な中腰の姿勢から手をのばし、文庫本を拾い上げるや、さっと泥を払ってこつちによこす。

「読んだよ、これ」

緊張走る現場の空気とは裏腹に、声は無関心に冷めていた。気色ばみ包囲するボルゾイ一同は完全無視、不敵な態度で呟く相手にむかい、一回生唾を嚙下し聞き返す。

「どうだった？」

「いまいち」

言葉を選ぶように一呼吸おき、幻滅とも脱帽ともつかぬため息をつく。

「まさか犯人が助手で、凶器が高枝切りバサミとはな」

それが同じクラスになって初めて麻生譲と交わした会話だった。

そうだ。

思い出した。

初めてまともに交わした会話で相手が読んでる推理小説のネタバレするような外道だったのだ、麻生は。

第一印象サイアク。

